
ハリボテ町

ぬじゃわきし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハリボテ町

【Nコード】

N0234N

【作者名】

ぬじゃわきし

【あらすじ】

住んでいた町が実は機械で巧妙に演出された虚構であった！はたして原因、真相とは！？

真美子と達志は高校の友達で、帰り道の電車がいつも一緒だったのと一緒に帰っていた。当初はクラスの皆がカップル成立だの騒いでいたが、やがてからかうのも疲れたのか、それは見慣れた光景の一つに数えられ、関心も薄れていった。

以前の二人は良き友達で、よく喋り、よく語り合った仲だった。あるときから彼の方から言葉数が減り、やがて無言になった。彼は以前よりも思い詰めたような表情になったり、かと思ったら悟りきったようなすました表情になったり、以前の快活な彼とはどこか違っていた。

「疲れたねー」

「・・・ああ。」

「なんか夕日きれいだねー。」

「ほんとだ、きれいだね・・・」

「どうしたの？達つちゃん。」

「何が・・・？」

「なんか静かじゃん。」

「そう・・・？気のせいだよ・・・」

彼に何か起きたに違いない、と真美子は思った。いったいそれは何であろう。引越するのか。いやまさか。実は私に何かしでかしたのか。そんな訳は。まさか彼女が出来て気まづくなったのか。

「達つちゃん、彼女できたの？」

「え？なんで？」

「だって、なんかこのごろ私と話さないじゃん。」

「いや、違うよ。彼女なんかいない・・・」

がたんごとん、と電車が揺れた。窓はきれいな田舎町を映し出している。達志は自分に言い聞かせるように再び、「彼女なんか・・・いない。」と言った。

しばらく沈黙が訪れる。真美子と達志の膝に夕日が映し出されていた。電車は相変わらず進んでいる。

真美子はひよっとしたら、私に告白するんじゃないかと妙な事を思いついてしまった。そうなった状況を彼女は少し考えたが、期待と共に、戸惑いすら感じた。

そして達志が口を開いた。

「なあ・・・真美子。」

「・・・何？」

「僕は・・・君に告白しなければいけないことがある。」

まさか・・・と真美子は思った。告白する言葉にしてはちよつと劇的だが、真美子は次の言葉を待った。

「僕は・・・」

そして達志は口ごもり、そして言う。

「やっぱりいいや。」

じらすんじゃないよ、と真美子はイライラし、言う。

「何？達つちゃん、せつかくここまで言っただから。」

「達つちゃんて言うな！！！」

友人としての呼び名を拒否するほど、彼は追い詰められてるのか。真美子が黙っていると達志はしばらく悩むような表情の後、決心して言った。

「僕は！」

僕は・・・？

「達志じゃないんだ！」

真美子は一瞬思考が止まった。そして言った。

「へ．．．．？」

「僕は．．．達志じゃない．．．達志の．．．代役だ．．．．．
．．．そうだ．．．．．」

「え？どういうこと！？」

「君が普段住んでる世界は虚構なんだ！騙されてはいけない！」

訳のわからない事を次々と“彼”が言ったので、彼女はますます混乱した。

「だから、どういうこと？」

「こういうことだあああ！！！！！」

達志は突然窓に向かい、バックで窓を何度もがんがんに叩いた。突然の奇行に真美子は止めようとした。

「なにやってんの！止めなさい！」

「これを見ればわかる、これを見ればわかるんだ！」

バリーン。窓は割れて、夕日の景色が崩れ落ちた。真美子は目を疑った。そう。もう一度書くが、「夕日の景色」が崩れ落ちたのだ。他の窓は夕焼けの田舎町を映しているが、この割った窓だけは、向こう側が真っ暗であった。

「分かっただろう？この窓は高性能のディスプレイだ．．．田舎町なんてウソだ．．．ここは．．．腐った都会だ．．．．」

サイレンが鳴った。

「逃げる！隣の車両へ行け！はやく！知らないフリをしろ！」

真美子は“彼”に言われた通り、隣の車両へ急いだ。偽の夕焼けの光りに照らされた椅子に座った途端、どどどどと“彼”の乗っていた車両に黒服の部隊が現れ、“彼”は捕らえられた。真美子は一瞬それを見て悲鳴を上げそうになったが、なんとかこらえた。黒装束部隊は真美子の車両にもおとづれたが、真美子は居眠りをするフリをしていたため、なんとか彼らの検問から逃れられた。本当は彼女は眠るどころではなかったが。

それから次の日、達志は学校に来て、平然と挨拶した。

「おはよう！真美子ちゃん！」

真美子ちゃん…以前は真美ちゃんだったのに。恐らく彼も昨日の“彼”と同じ偽物なのだろう。そもそも本物の達志はいたのだろうか…とさえ思った。彼女は何気なく訊ねた。

「昨日何か言いかけた？」

「昨日？何も。」

「そう…気のせいね…」

やはり、昨日の彼とは他人である。当然だ。昨日の彼は捕まったのだから。真美子は納得し、「何でもない」と言っただけでその場を去った。

その後の電車でも、“彼”はいつも通り快活ではあったが、むしろ真美子は違和感を感じた。いつも通り、が崩れた今、いつもの彼が不気味であった。気を紛らせようと窓の景色を見ても、その景色は虚構である。やがて最寄り駅に着いたので彼女は達志と別れ、電車から出た。

誰かが尾行している。帰り道、真美子はそんな気がした。視線を感じたのだ。後ろを振り返る。誰もいない。では、やはり、気のせいかな。しかし向き直って再び歩き始めると視線を再び感じた。もう一度振り返った。スーツ姿の男がいた。男は何気無いフリをして後ろを向いて去ったが、一瞬した慌てた表情を見逃さなかった。あいつは尾行している。何のため。彼女は追いかけた。男は気づいて速足で逃げ出した。彼女は追いかける。男は角を曲がったので、真美子も角を曲がった。

だが男はいない。あれ？さっきまで角を曲がったのに。彼女はおかしいなと思い、前を歩き、見回った。交差点にさしかかったが、マンホール以外何もない。彼女は途方に暮れた。

だが、突然横断歩道の白く塗られた一部分ががたと音を立てて開いた。真美子は走って向かった。開いた場所からあのスーツ男が飛び出した。男は青ざめ、真美子は男の首を肘で掴んで言った。

「何尾行してるの！」

男は真美子の肘にしがみついて外そうともがき、後ろに仰け反った。真美子は後ろに吹っ飛ばされ、その隙に男は逃げ出した。真美子は起き上がり、男を追ったが、男は急いで自動販売機に向かい、お金を入れ、ボタンを押した。ジュースを買うのかと思った次の瞬間、自動販売機がスライドして開き、エレベーターが現れた。真美子が驚く隙に男は中に入って、自動販売機を閉めた。自動販売機はいつものように缶を並べて立っていた。真美子は暫く呆然として、自動販売機のボタンをがちやがちや押したが作動しない。色々お金を入れたりして試したが、自動販売機は真美子を前に沈黙している。やがて彼女はひとまず諦めて家に帰った。

達志との違和感はい日に感じ、やがて話すのも嫌になる程であった。だが、ある日電車内で訊ねられた。

「真美子ちゃん…どうしたの？何かあったの？」

唐突の質問。

「え？」

「だって最近話さないじゃないか。」

やがて、その質問は自分も以前同様の事を以前の達志に訊ねた事に、真美子は気づいた。前の自分同様、彼も自分が話さない事を不審がつているのだ。

「気のせいよ。」

以前の彼のように真相を打ち明ける訳にはいかない。あの部隊がどこに拉致するのか分からないが、恐らくろくな事にならないだろう。自らの保身の為なのかと言えば聞こえは悪いが、今ここにいる“友人”は実際は赤の他人である。何のためらいもいらぬ。

「ところでさあ、この前の古文の授業なんだけど」

彼女は話題を変えた。彼に怪しまれないために。しかし、どうしても無理に話してしまっていて、彼も薄々勘づいている。だんだん嫌になって、また黙ってしまう。

その時、電車の車両扉ががららと音を立てて開いた。スーツ姿の男だ。あの尾行したあの…。

真美子は息を呑んだ。男は話しかけた。

「相田真美子さんですね…。」

真美子は怯えた。達志は言った。

「何の用だ！」

「いやいやこれは失敬…実は秘密警察の者でして…」

男はバッジを提示すると達志はわあど驚き、真美子を見た。

「真美子、何をした・・・」
真美子が慌てふためく隙に、男は真美子を手錠に掛けて連行した・・・。

電車が駅に着いた時、そのまま男と真美子は電車から出た。そして、ホーム内を歩き回り、やがて、自動販売機を発見した。男は財布から32円を取り出して自販に入れた。当然2円はおつり口から飛び出す。そして120円や150円の値段のするジュースのボタンを乱雑に押した。当然ジュースは出てこない。そしておつり返却レバーをぐいと下げた。30円が戻ってきたので、男はそれを受け取った。

その時、自動販売機がゴガ、シューーと音を立てて、動き出した。今のはパスワードだったらしい。ドアのように開いた自動販売機の、その奥はエレベーターであつた。男は真美子を連れて中に入った。

エレベーター内で男は言った。

「手錠をかけてすまない。私は本当は警察ではない。」

「警察じゃないの？じゃあ何の目的!？」

「落ち着け。君は見えてはいけないものを二つ目撃した。それくらい推測されている。おそらく、今行かなかつたら本当の警察がお前を捕まえていた。」

「・・・あなたは誰？」

「私は反乱組織の者だ。この虚構に満ちた世界を暴く。まあ、下にいったらわかる。とりあえず手錠を外そう。」

男は真美子の手錠を放した。

エレベーターが止まった。おそらくここはるか地下。そしてゆっくり扉が開かれた。

そこには達志がいた。

「！！！？？？達志？」

「まあ、そうだ。だが、君の目の前で警察隊にさらわれた達志の、3代前の達志だ。処理されるところを危うく脱出した。」

「処理？」

「まあ、後で話すよ。」

「何なの？これ？貴方は本物の達志なの？偽者なの？」
しばらく沈黙し、やがて達志は言った。

「ではあれを見せるほかないな・・・ついてきて。」

達志に言われるとおりついていくと、小型船のようなものがある部屋に着いた。

「ステルス機能つきホバークラフト。これで、これからほぼ全ての裏の世界を探検しよう。」

真美子と達志はそれに乗って、ホバークラフトは起動した・・・。

ホバークラフトはゆっくり前に進んだ。真美子は達志に言った。

「ここは…どこなの？」

「ここは…さつきも言ったがはりぼての裏だ。いかに虚構の町を精巧に作りあげてるかがわかるだろう。」

ホバークラフトは進む。辺りは暗く、機械に包まれている。やがて一瞬だが、窓が見えた。中に大量の人間が横たわっている。

「何あれ！」

やがてホバークラフトは上昇し、青空が見えた。その時真美子が見たのは奇怪な光景であった。小さな町がいくつかあり、そこに非常に巨大な鉄壁がおおっていたのだ。

「こんな壁…あった？」

「あった。だがあの壁は精巧な3Dディスプレイで、町の住民からはただの山に見える。あのディスプレイの目的は、この場所を隠すためなのだろう。」

「でも、普通に探検とかしたらばれない？」

「そうなればすぐに処分される。」

「処分…て…人が減るの…」

「いや、そうではない…次行こう。」

ホバークラフトは下降した。そして先程通過した、大量の人間が横たわる部屋に着いた。それはよく見ると同じ顔であった。

「何これ!？」

「コピーだよ。」

「コピー？」

「君は3人の僕に会ったはずだ。一人は警察にさらわれた僕、もう一人は今あのはりぼて町に何食わぬ顔で君を『真美子ちゃん』と呼ぶ僕、三人目はこの僕だ。」

「？」

「僕も、あの並んでる人みたいに量産されているんだよ。皆記憶を植え付けられ、町の人が処分されるとストックされる。だが、完全にコピーができる訳ではなく、認識力の違いもある。だから記憶を植え付ける過程で何らかの差違は生じる。『真美子ちゃん』はその一つだ。」

真美子は聞いているうちに、ある恐ろしい予想が浮かんだ。

「じゃあ…私も…」

「そう、残念ながら君も僕と同じコピーだ。知らず知らずの内にね。君の前の数人はこの目で見た。」

真美子は後退りして言った。

「嘘！嘘！」

「証拠と言われれば君のコピーに案内するけど。」

「私がコピー？じゃあ本物はだれ？」

「分からない。」

「私は本当は誰なの？」

「君は、真美子だ。」

「違う！…」

真美子は混乱した。世界どころか自分が虚構だったとは…自分は現実を演ずる俳優に過ぎなかった。しかし、俳優が存在する為には観客が必要だ。つまり外部に誰がいる。

「そもそも誰が、こんな事を始めたの…？」

「それを調べるのが我々の目的だ。」

達志によると、警察もコピーらしい。つまり、彼らも何者かに操られているわけだ。それが誰かは完全に隠されている。従って残るはハッキングしかなかった。はりばて町を管理するコンピューターから解析するしかない。

そして、

「ちよつと、報告があります。」

とパソコン前の組織員が言った。達志が「何？」と訊ねると答えた。

「警察のコンピューターを渡り渡りに見張った結果、不思議な話が。」

「何だ？」

「どのコンピューターも、あるコンピューターと直結しているらしいのです。らしいと言うのは、セキュリティが強すぎてアクセス拒否されたからです。ただし、場所の推測は可能です。」

「どこだ？」

「B3区です。」

「ホバークラフトの通り抜けは不可能だな。」

「そうですね。確実に監視区域に入っています。」

「よし…真美！」

達志は振り返って叫んだ。すっかり組織員となった真美子に言った。

「行こう！」

二人は自動販売機から出た。いつもの町のはずだったが、今や真美子にとって何か違って見えた。達志は言った。

「帽子とサングラスをつけよう。今や違う真美子が町を歩いているはずだ。」

言い終わるや否や、真美子が二人の左を過ぎた。二人は何食わぬ顔をしたが、彼女は自分のコピーを見て背筋に寒気が走った。

ふと達志が奇妙な行動をしていることに真美子は気づいた。彼はあちこちに砂の粒を撒いていたのだ。

「達志・・・何やってるの？」

「・・・後で分かるさ。」

そのうち、いつも登校で使っている最寄り駅に着く。

「乗ろう。」

「うん。」

いつもの駅。いつもの電車。前だったらここから学校に向かうのだが、今は通学とは反対方向だ。達志は言う。

「そろそろ別の地点に通過するところだ。今は外は真っ暗なはずだ。もちろんこの景色はイミテーションだよ。」

達志が指差した先の窓はただの青空と田園だ。

「この偏光サングラスをかけてごらん」

と達志はサングラスを渡した。真美子はサングラスを掛けた。

「あっ」

窓は真っ暗であつた・・・

そして駅につく。

「ここは・・・」

「B3区。不思議だな・・・僕の住んでる町だ・・・」

達志はそういいながらまた砂を撒いていた。気になったがとりあえずほっといた。

真美子はあの偏光サングラスを掛けながら町を歩き回った。明るい晴れた日のはずなのに、実はあたりが真っ暗であることを彼女は知る。

「わかったぞ・・・真美ちゃん、君が前に出会った“僕”は、なぜかここがハリボテ町である事を知っていたよね!？」

「そうだけど・・・」

「知っていながら生き長らえた・・・ということは、町の囲いの外に出たわけでもない・・・コンピュータの存在を考えても、この町の中で何かを見た可能性がある・・・」

達志は携帯電話を取り出し、組織員に電話した。

「あ、もしもし？この前真美子と一緒に電車に乗って、警察に連行された達志がいるじゃん、あれ今どうなったの？」

「彼は・・・死んだよ」

「え。」

「処分された。」

「処分の際何か言ってなかったか？」

「あ、ちよつとまって・・・映像入手！」

映像から達志の悲鳴が流れてきた。

『ぐああああ、真美いいいい、僕の家だああ、僕の家にい、がつ・
・・・』

映像を聞いて、達志は組織員に礼を言った。

「・・・・・・ありがとう。」

「するとあの達つちゃんは、自分の家で何かを見たってこと？」
「でしょう。ということは、あの家のどこかに秘密があるに違いない。」

「これから搜索するのね。」

「そうだ。」

達志の家。

「この中に達つちゃんがいるかもしれない。」

「そうだな。」

「インターホン押してみる？」

「だめだ。防衛システムがあるだろう。インターホンのボタンはX線による指紋認証がある。仮に手袋をしても無駄だ。おそらくインターホンを押した途端、処分逃れの真美子と気づかれて、爆発するだろう。」

「どうすればいいの？」

「強行しかない。」

達志はドアを蹴やぶった。たちまち警報が鳴った。

「急いで、入り口を探せ！」

真美子はリビングを探し回った。あたりは猫とか犬とかが寝ている。鳥もいる。平和そうな光景である。だが、これは演出か。真美子は部屋の中を歩く。部屋は一方はタイル張りでもう一方は木の床だ。部屋の端にパソコンがある。真美子はそれを見た。インターネットが開きっぱなしだ。一番上にはこう書かれていた。

『最近達志が変。そう真美子は感じていた。

真美子と達志は高校の友達で、帰り道の電車がいつも一緒だったのと一緒に帰っていた。当初はクラスの皆がカップル成立だの騒いでいたが、やがてからかうのも疲れたのか』

だれかが私たちを監視しているのだわと感じた。そしてそれを何者かに公表しようとしている。

また探す。だが、変な予感がした。そばで猫の眠っているタイル床だ。

これは・・・まさか・・・真美子はタイル床を掴んだ。動く。なんと持ち上がった。真美子はおどろいた。持ち上げるとそこは穴で、中にはしごがあった。真美子は「達っちゃーん！入り口発見したよ！」と呼んで、中に入ってしまった。

床下の梯子を二人はひたすら下る。あたりは真っ暗で、真美子の点けた懐中電灯のあたり以外何も見えない。不安に思いつつ下る。

「あつ」

真美子が軽く声を上げる。

「床だわ。」

そう。ようやく最下層についたのである。目の前には扉があった。扉の後ろを真美子は振り返った。小型のホバークラフトみたいなものがある。

「何かしら、こんな地下に。」

「格納してるんじゃない？とりあえず扉の向こうに行こう。」

そう達志は言つて、扉を開けた。その時も達志は相変わらず砂を撒いていた。

中を見て二人は驚いた。両端に巨大な水槽があり、どちらも人が沢山浮かんでいた。それはよく見ると、右端が達志のコピー達、左端が真美子のコピー達だった。

真美子は悲鳴を上げたが、達志は「あれ？」と言つたので真美子は訊ねた。

「どうしたの？」

「真美ちゃんのコピーは、僕のホテルに行ける場所な筈だ。僕の家のあるB2区じゃないはずだ。ホテルで行けないから歩いたのに。」

「違う施設だからだ。」

突如後ろから声が聞こえてきた。

「だれ？」

「違う施設…だからだ…君の見たのは…恐らく…安置室だろう…ここは…生産する場所だ。」

そう言いながら、その人はゆっくり近づいて、やがて明かりで姿がはっきりしてきた。二人は彼を見て驚いた。

「あなたは！」

「そうだ…私だ…」

それは老人だが明らかに達志であった。すっかり白髪で、皺だらけで、杖もつかねば満足に歩けない状態であった。

「私が本当の達志だ…君たちは私の技術で作られたコピー…」

「何のためにこんなのを作ったの？」

真美子が訊ねると、老人の達志は答えた。

「…君だ。真美子。君がきっかけだ。」

「私は昔、幼い頃から真美子と親友だった。君たちの生活同様帰り道はいつも一緒に」

「だが、ある日不幸が起きた。真美子を事故で失ったのだ。爆発に巻き込まれた。私は非常に衝撃を受け、立ち直れなかった。私と彼女は家族のような強い繋がりがあったのだ。」

「私は来る日も来る日もかつての友人との幸せな日々を思い返し、夢想した。やがて、私はこれらを再現しよう、と思い立った。」

「私はさまざまな方法を検証した。最初はコンピューターで人工知能をつくり、会話した。だが所詮は定義された存在、満足できる訳はない。」

「やがて私は、私自身では満たす事が不可能であることを知った。私はもう、すっかり年をとった。」

「そこで私は、私自身を複製させる事を思い至った。記憶を植え付ける方法とクローンの方法は知っている。今の私では決してできない日々を代わりにコピーの私で実現させる。」

「でも、コピーをこれまでいくつも殺した。」

青年の達志が言い返すと老人が言った。

「無論、生物という力オスに頼る以上、何らかの意図に反した行動

に出る“私”もいる。『真美子ちゃん』と『真美ちゃん』の呼び名の差程度ならともかく、見ては行けないハリボテの裏を見たり、教えたりする馬鹿者もいる。君たちみたいにな。」

突然老人達志は杖を振り回して銃のように構え、言った。

「これはショットガンだ。放てば必ず二人とも死ぬ。ただの大人しい老人と思つたら間違いだ！」

だが、青年の達志は言い返した。

「そんな事をして無駄だ。実は僕はこの光景を撮っていたのだ。」
「なに？」

青年達志はうなじに張り付いている小型カメラを引っ張つてはつきり見せた。

老人達志は言った。

「なら、早めに始末しないとな。」

「だが、実はこれはバックアップされてる。するだけ無駄さ。」

「なに？バックアップするためには電波で送信するだろう？それだけ大容量なデータを遠くに一気に送ると、多大な電波を使うから、大きな監視レーダーで探知されて、今頃ここにいないはずだ！」

「そう、だからこれを使った。」

青年達志は以前に地面にまいた砂粒を見せた。

「……？」

「小型の通信機。これをあちこちに撒いてデータの通り道に使った。近くの方に送信するのにそう電気は使わない。それを繰り返して遠くに送った。だからレーダーにも探知されない。」

なるほど、それで、砂を撒いたのか、と真美子は納得した。達志は話を続ける。

「もうじきこのデータは全国に流れる。大規模な反乱が起きるぞ。もう、本物の“僕”の支配は終わったわけだ。」

老人達志は杖を下ろした。そしてうつむき、やがて、くくく、と笑いだした。そして独り言を言った。

「私は…本物、じゃ、ないぞ…本物の“私”から管理を任せられた

コピーだ…ち、ちくしょう、なんでこんな仕事をしなきゃいけない…」

そして二人を見て言った。

「君たちの世界は四つの場所しかない。真美子の世界、私をふくむ達志の世界、学校の世界、その他の世界…それ以上に世界はない。地球の裏側にブラジルがあると君たちは学校から教わってるが、それは嘘だ。ブラジルは名前だけ。外国人の写真など作らされた茶番だ。君たちは君たちの住んでる世界しかないんだ。永久にそのままな…」

そしてうつむいて自分に語りかけた。

「考えてみれば、なぜ、私がこの世界を管理しなきゃいかん。本物の“私”の遺志をなぜ受け継がねばいかん。もはや面倒だ。みな、滅んでしまえ…なに全員コピーだから殺人ではあるまい…うはははははは、うははははははは」

老人達志は杖を突然床の隙間のある部位に差し込んだ。そして杖から飛び出したボタンを押し、サイレンが鳴り、老人はへなへなと座り込んで飽きることなく笑い続けた。

「世界が滅びる？」

「まさか！」

「とにかく逃げよう！」

「どこに？上に逃げても滅びたら駄目じゃん！」

「扉の裏側は？」

「あ、ホバークラフト！」

「いちかばちかだね！」

二人は扉に向かい、扉を開け、ホバークラフトに乗った。

「始動！」

ホバークラフトを起動したとたん、後ろと上の入り口がシャッターで閉じられた。

「え？どゆこと？」

次の瞬間、ホバークラフトの前のシャッターが開いた。そこは星空。

急激な風を感じてホバークラフトは放り出された。

「エアロックだったんだね…」

達志がぼそりと言った。真美子は振り返る。そこは地球ではなかった。虚空の宇宙に浮かぶスペースコロニーだった。地球は近くに浮かんでいた。

「そんな、」

次の瞬間コロニーは大爆発した。破片が散り、ホバークラフトは飛ばされた。

「わあああ！」

その時、二人は見た。金属性の棺桶に眠っている老人の達志を。彼こそ本物の達志に違いない。コピーの老人が言うように、想い出と幻想を求めてただ一人、孤独の中で安らかに死んだ達志。棺桶はそのまま永久に宇宙の中を飛んでいた。

無重力の中、コピー人間の真美子と達志は見つめあった。やがて達志は言う。

「地球へ行こう。」

そしてホバークラフトは向きを変え、地球へと飛び立った。

（完）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0234n/>

ハリボテ町

2010年10月10日04時55分発行